

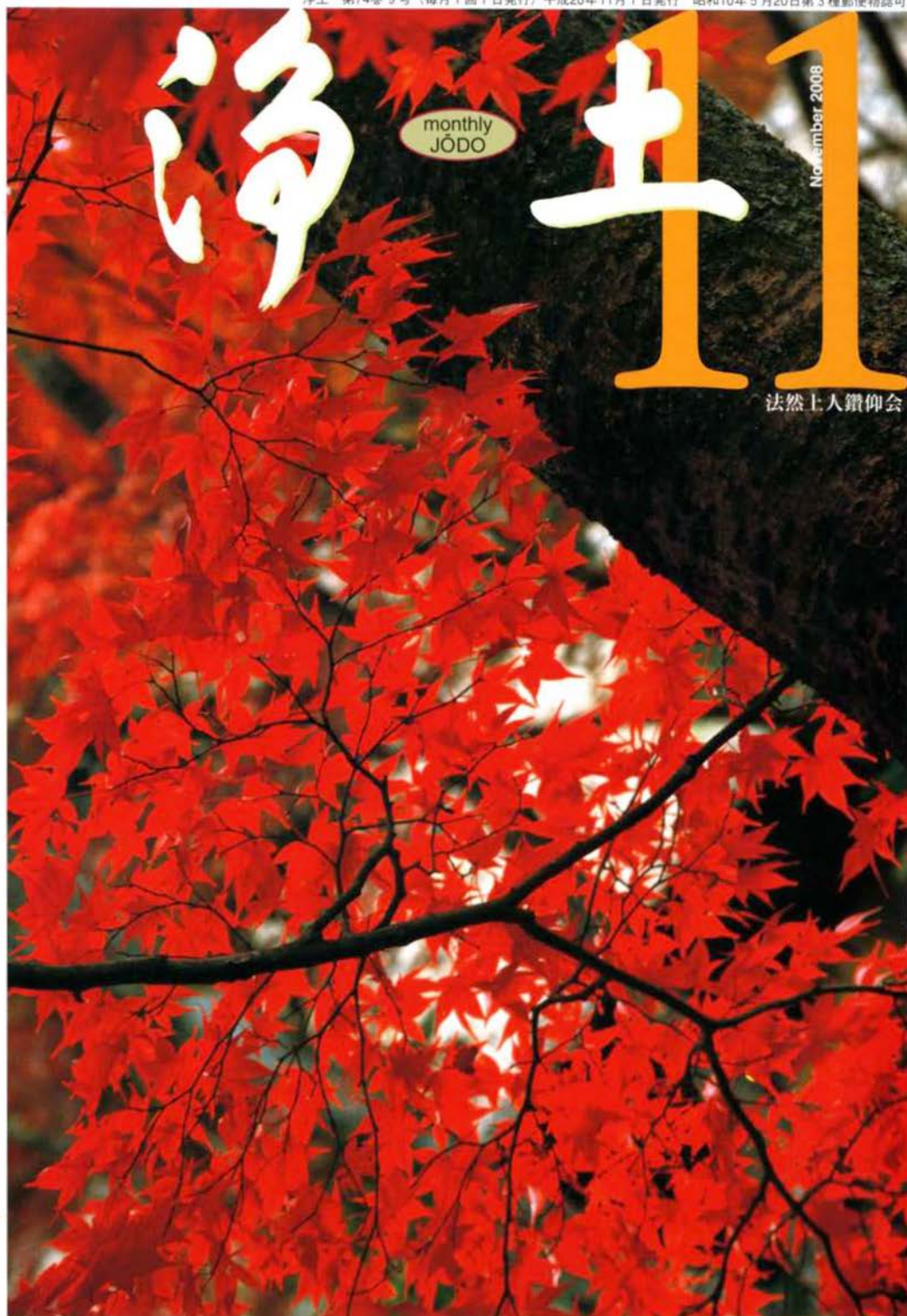
浄

monthly
JODO

土

November 2008

法然上人讃仰会



南無阿弥陀佛と称え給えば、

住所は隔つといえども、源空に親しとなす。

源空も南無阿弥陀佛と称え奉るが故なり

(十六門記 第十三)

鬼海弘雄『浄土』2008年年間表紙写真の人

きかいひろお 1945年山形県寒河江市生まれ

法政大学文学部哲学科卒業。山形県職員を辞して、トラック運転手、造船所工員、遠洋マグロ漁船乗組員など様々な職業を経て写真家に。1973年より浅草寺で人物写真を撮りはじめる。

APA賞特選、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、「写真の会」賞受賞。

写真集「PERSONA」で第23回土門拳賞受賞。

写真集

『王たちの肖像：浅草寺境内』矢立出版1987年、『India』みすず書房1992年、『や・ちまた：王たちの回廊』みすず書房1996年、『東京迷路』小学館1999年、『印度や月山』白水社1999年、『しあわせ：インド大地の子どもたち』福音館2001年、『Persona』草思社2003年、『べるそな』草思社2005年、『In-between8 鬼海弘雄 ホルトガル、マルタ』EU・ジャパンフェスト日本委員会2005年、『東京夢譚』草思社2007年、『集合住宅物語』みすず書房2004年（撮影・鬼海弘雄 文：植田実）、『メッセージ』樹立社2006年（撮影・鬼海弘雄 文：都はるみ）

浄土

2008/11月号 目次

講演概録 現代の信仰のかたち②	梶村 昇	2
仏教コラム	大室了皓	11
江戸を歩く 第二十一回	森 清鑑	12
会いたい人 戌井市郎さん③	関 容子	24
響流十方	林田康順	32
法然上人とその時代 壇の浦	石丸晶子	36
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48
連載 教えと法話	生野善應	



表紙題字＝中村康隆前浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人讃仰会

公開講演会

その二

現代の信仰のかたち

法然上人の

視線でみる

今

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

日本人の受け入れた仏教

五三八年に仏教が伝わってくる。それ以前の日本人は、三つ子の魂で、祖先崇拜信仰を持っています。仏教とこれがぶつかったのです。

さあ、どうするかというと、祖先崇拜信仰はなくならないのですから、入ってきた仏教のうち、自分たちに合うものだけを取るのです。祖先崇拜信仰と合わないものは取らない。だから、日本仏教は祖先崇拜仏教になるのです。当たり前のことです。

もちろん今のままでいいと言っているわけではありません。どうか間違わないでください。

中学から高校、大学と習ってきた日本の歴史で、日本仏教は奈良時代には、「あおによし奈良の都は咲く花の……」というほど盛んだったのです。そういうことを習ってきました。それは間違いじゃありません。そのとおりです。

そのときに、ふっと、これが観念というのでしょうか、日本中熱心な仏教徒になったと思いませんでしたか。私は、そう思いました。

しかし考えてごらん下さい。今でさえ難しい仏教が、あの当時、仏教が広まったからといって、日本中が仏教の哲理を知って、悟りを開いてということではありません。

それでは、あの盛んになった仏教は何だったのかといいますと、日本人は仏教のいいところと自分たちの祖先崇拜信仰に合うところだけ受け入れて、端的に言えば、祖先崇拜信仰に仏教の衣を着せて、「ハイ、日本仏教でございます」と考えたのです。奈良時代の民衆というのは、全部それだったと思うのです。いささか極論かも知れませんが。

3. 二階建て宗教構

イ. 2階に仏教界、1階に庶民。

それでは、お釈迦さまの仏教は、どこへ行つたのか。それを私は日本仏教の二階建て宗教構造として説明しようと思います。理解しやすくするために、「二階」と「一階」としたのです。

二階というのは、仏教界なのです。そこが入ってきた仏教を受け入れる。今、奈良時代の仏教の論文を読みますと、大変難しいです。なぜかというと、入ってきた仏教をそのまま研究しているのです。お釈迦さまから、中央アジアを通じて、中国を通じて日本へ来ている仏教ですから、大変難しいです。それを研究しています。ですから、奈良仏教にしろ、平安仏教にしろ、仏教界で学ぶ仏教というのは大変難しいのです。

では、庶民の方はどうかというと、一階に住んで、祖先崇拜信仰の身に仏教の衣を着て、「ハイ、これが仏教です」と言っていたのです。要するに、仏教界の仏教と日本人の大多数の一階の仏教とは、そういう食い違いがあったということです。

しかし、もう少し中へ入って考えてみてください。二階で仏教界だとおっしゃっている仏教界の人も日本人です。三つ子の魂を持って二階へ行つた人だから、ちゃんと祖先崇拜信仰を持って仏教を勉強しているのです。

それでは仏教学はどうかというと、入ってきた学問で、それだけで独立した学問なのです。要するに自分と学問とが乖離しているのです。

ちょうど理科で何かの実験をするようなもので、自分は自分、入ってきた教学は教学と

いうわけです。だから、教学は大変です。ものすごく研究が熱心です。だから、日本仏教の教学は大変高度です。本当に完璧に近い論理を組み立てた教学です。

しかし、それはそれだけ。一階のほうは、今、言ったように、祖先崇拜信仰の上に組み立てられた仏教だということです。

□、一、二階をつなぐ階段がない。

これが二階建て宗教構造。二階に仏教界、一階に庶民ですが、この建物には一、二階をつなぐ階段がないのです。だから、仏教界は仏教界だけでやっている。下は下だけでやっている。階段がないから、布教ができない。中には偉い人がいた。東大寺をつくった行基菩薩という人は一階と二階とをつないだ人です。

平安時代に入りますと、空也上人という方も出てきます。仏教を民衆に広める。行基菩薩や空也上人は傑物ですが、一代で終わります。その後が続かないのです。

ハ、二階は教学研究、一階は祖先崇拜信仰。

要するに、二階と一階とは切り離されて続いてないわけです。二階は教学研究、一階は祖先崇拜信仰です。

奈良時代は仏教が盛んだった。それは仏教界が盛んであったということであって、庶民、日本人全体の仏教信仰が盛んであったという意味ではないと、私は思います。

4. 日本仏教の課題

イ、法然が一、二階をつなぐ万人の仏教。

□、葬式仏教に傾斜し、真実の宗教に遠ざかる。

法然上人は比叡山に上がり、目のあたりに二階のものすごい精緻な仏教教学を見ました。

知恵第一の法然房ですから、それは理解できました。しかも、真面目な法然上人ですから、教えのとおり一生懸命やったのです。ところが、現実ではそれはただの教学だけ、理屈だけで、実行できるものではない。

法然上人の一番悩み苦しんだのは、自分にできるものは何なのかということです。そして、求道の末に南無阿弥陀仏という教えを説いたのです。これが法然上人の教えです。

法然上人が開いた南無阿弥陀仏という教えは、釈尊の仏教なんです。釈尊から伝わってきた仏教です。しかも、それが、日本人ができる祖先崇拜信仰と結びついた仏教でした。法然上人は一、二階をつなぐ万人の仏教を開いたのです。

法然上人によって初めて日本仏教は祖先崇拜信仰を生かしながら、しかも、釈尊の教えに結びついた。一、二階をつなぐ仏教で、そこには僧侶も庶民も、みんな一つにつながった道だと思うのです。

それが、日本仏教史を法然上人の視線で見た見方と言えると思います。

〔3〕現代の信仰のかたち

1. 神はあるか、ないか。

中公新書ラクレに出ている『大学教授コテンパン・ジョーク集』という本からの引用です。

「先日、このようなジョークにお目にかかった。哲学の授業で神の存在について議論して

いた。教授が言った。

「誰か神の声を聞いたことがありますか？」誰も何も言わない。

「誰か神に触れたことがありますか？」再び沈黙。

「誰か神を見たことはありませんか？」静寂のまま。

「ゆえに神は存在しない」と教授は言った。

すると、ある学生が手を挙げて発言を求めた。教授は好奇心に駆られて発言を許可した。彼女は、次の質問を出席者にした。

「誰か、この教授の脳が何かを言うのを聞いたことがありますか？」誰も何も言わない。

「誰か、この教授の脳に触れたことがありますか？」再び沈黙。

「誰か、この教授の脳を見たことがありますか？」静寂のまま。

「ゆえに、教授の脳は存在しない」と学生は言った。

その学生は成績Aをもらったのは言うまでもない

というジョークです。これは神があるかないかという話です。

もう一つ紹介します。これは脳科学の第四回小林秀雄賞をいただいた茂木健一郎さんの『脳と仮想』（新潮社）という、いわば最先端科学の現場から意識の問題に切り込んだ本です。

筆者は、こう書いています。

「羽田空港の食堂で、五歳くらいの女の子が、隣の妹に「ね、サンタさんっていると思う？」と話しかけているのを聞いた。「脳から心がどのように生み出されるか」という謎

に取り組み始めてから七年が経過していた筆者は、この話題から解き始めて、最後の「仮想を生きる」の項でこう述べている。

五歳の女の子にとってのサンタクロースから、臨終を迎える（ゲートの）ファーストにとっての、永遠にして女性的なるものまで、この世界のどこにも存在しないものたちを思い描くことなしでは、恐らく私たちの魂は、この世界の現実には堪えられない。

私たちの命を支え、この世界のリアリティーを支える体や現実自体も、この私の魂の中であらわれにおいて、まだ仮想であるとするならば、私たちは仮想を生きるしかないということになる」。

最初のジョークと、この論考とには、おのずから質感の相違はあるが、いずれも神の存在をめぐっての話であることには違いない。

こういう話は昔から今まで絶えることなく論じられている。「神はあるかないか」「仏はあるかないか」「天国はあるか、極楽は」という問いである。「それが絶えることがない」ということは、これは人間にとって永遠の課題であるということなのである」と言つて、この状態をいつまで続けるのであろうか。

答えがすぐ出るわけではないが、せめて、なぜこの問題が永遠の課題なのか、なぜ解決がつかないのかを考えてみたい。

思うに、それは神の存在を問う立場と、それに応える立場とが、同じ土俵の上で相撲をとっていないからである。問う方は、世俗世界に足を踏まえて尋ねているが、答えるほうは、宗教世界のことを話しているのであるから、相撲にならない。

両者の間に大きな山がある。その山が世俗世界と宗教世界とを隔てている。山のこちら

と向こうとでは、考え合っていることがかみ合わない。

それでは、山のこちら側（世俗世界）の考え方とは、どういうものであろうか。そのことを『脳と仮想』の筆者はこう言っている。

「近代科学の下での世界観は、さまざまな物質からなる現実の世界こそが、この世で唯一の確実な存在であるというものだった。

私たちの身体が存在し、脳が存在する。目の前のコップが存在し、机が存在する。地球が存在し、太陽系が存在し、宇宙が存在する。そのような物質的存在が、方程式で記述できる自然法則で変化していく。これこそが、この世界で確実なことである、と考えられた」というのである。世俗世界では、これがこの世で確実なことと考えられている。ところが、宗教世界では、西方十億土の彼方に極楽があり、そこに教主阿弥陀仏がいて、南無阿弥陀仏と称えた人をすべて極楽に摂取するという、およそ世俗の考え方からすれば考えられないことを言っている。

宗教世界もこのことを十分にわかっていて、『阿弥陀経』では「一切世間難信之法」と言い、「不可思議功德」と述べている。世俗の思惟では信じがたく、思議しがたい教えであり、功德であるというのである。

これでは、両者は平行線であり、かみ合うわけではない。それなら、いつそのこと世俗はこの世で確実なことと思っていることに頼って、それだけで生きていけばよさそうなものがあるが、そう突き放すと、この世界のどこにも存在しないものたちを思い描くことなしでは、恐らく私たちの魂は、この世界の現実には堪えられない」という。

これは、いい言葉です。何でも現実でわかること、それだけに頼っていけばいいではな

いか。宗教なんてもう要らないという考え方もあろう。しかし茂木さんはこう言っている。「この世界のどこにも存在しないものたちを思い描くことなしでは、恐らく私たちの魂は、この世界の現実には堪えられない」

要するに、極楽、天国ということを思い描くことなしでは、生きていられないだろうと言っているのです。

とすれば、両者はどこかで交わらなければならない。交わるには、両者を隔てている大きな山を越えなければならぬ。越えない限り、山の向こうを見ることはできない。どうすれば越えられるであろうか。宗教はその越え方を説いております。

祈りといい、坐禅といい、念仏といい、みんなその越え方にかかわる教えだと、私は思っています。

大きな山がある。こちらが世俗、今、私たちの世界。あちらが宗教的世界。こちらの人が、極楽があるかないかと問う。あつちはあると言う。こちらは考えられないから、ないと言っている。

両方で、ずっと人間はやってきている。なぜかという、この山のこちらとあちらで言っているのだから、土俵が違う。土俵が違ふところで相撲をとっているのだから、合うわけがないのです。

結局、私たちは、この大きな山をどっかで越えなければいけない。越えて少しあちらをのぞいてみるということです。この越え方が宗教だと思ふのです。

(つづく)

「眠れなくて困っています」

八十歳になったという婦人が訴えた。

「何を悩んでいるんですか。息子さんたちも大事にしてくれて幸せです、と言っておられましたね。不足なことがあるんですか」

「長年の友人が痴呆症と聞きましたので訪ねましたら、すっかりボケて、その変わり果てた姿にガックリしました。俳句集を自費出版し張り切っていましたのに。彼女のようにボケたらどうしよう。

考え出すと夜も眠れません」と。

「私もボケは怖い。ボケない方法はないようですね。

そこで開き直すことにしました。

ボケたっていいじゃないか、と。

私たちは苦勞を背負って生きています。三界皆苦というからやむを得ません

が、生きることの裏には苦勞が張り付いているんですね。

『苦勞が嫌なら死んじまえ』と、冗談を言う人がいますが、毎日八人以上の人が全国で自ら命を絶っています。苦勞の重荷に生きる力を失い楽になりたい。それが自死となったのでしょうか。

ボケた人が家族やお金に苦勞するでしょうか。自死する人もいません。ボケたら苦勞は無くなるんですね。無くなったらルンルンです。

でも貴方は考えるでしょう。

ボケたら迷惑をかける。それが辛いと。それならば、少しでも多く後に遺すように心掛けたらどうでしょうか。

そのくらいはお出来になるでしょう。

私もそのつもりです」

第二十一回

江戸を歩く

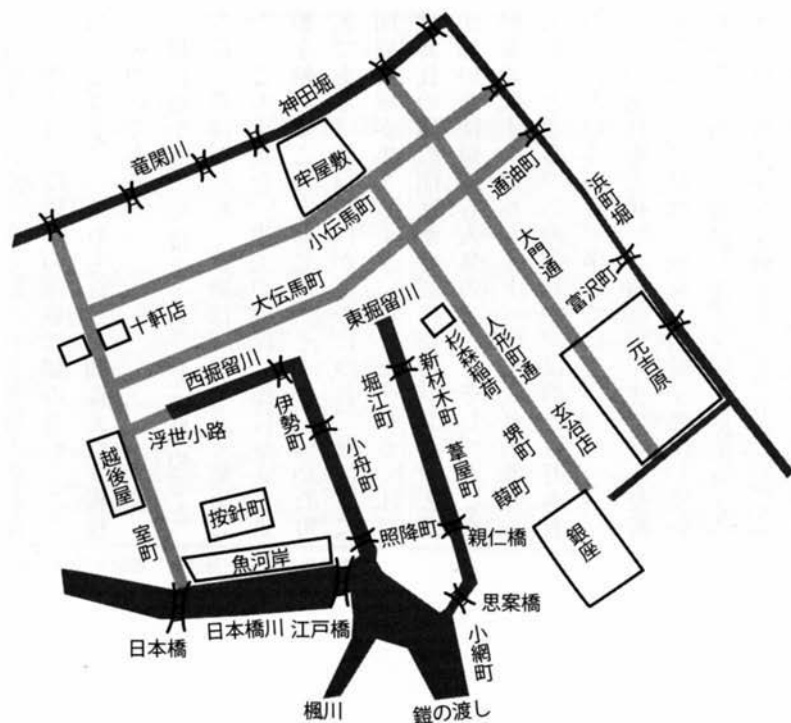
運河の町



大江戸ウォーカー
森清鑑

日本橋掘留

楓川を北上すると、日本橋川に出る。左は江戸橋広小路、右は牧野の上屋敷。そして眼前の、幅広い日本橋川の対岸に、二本の掘留川が北に向かって流れている。左、西掘留川、右、東掘留川である。双方とも、北に少し行くと、ぶつかりと遮られている。正に掘留。道で言えば広小路のような広がりを見せる日本橋川のこの部分とこの二本の堀には数えきれぬ舟が行き交っている。この辺り一帯が物資の集積地なのである。江戸時代より以前には、全体が石神井川の河口部で、大舟も着岸できる江戸湊であった。その後、数度の大工事が行われ、川の流れを変え、二本の掘留の形を残し、その周囲に、にぎやかな町が形成されていった。大川の豊海橋を潜って、日本橋川を様々な物資が運ばれてくる。そして掘留にも上がってくる。この堀自体が大きな河岸のようなものである。日本橋魚河岸も掘留



◆江戸「日本橋掘留界限」

沿いに形成された。二本の堀留川の間には、問屋が密集し、小舟町、堀江町という、江戸でも飛び切りの繁華街が出現した。

鎧の渡しを舟で渡り、小網町鎧河岸に着く。左に日本橋川を望みつつ、北に歩く。右手は商家が立ち並び、小網富士（富士信仰）が見える。山形屋海苔店の左手が東堀留川の最初の橋、思案橋（旧吉原遊郭に行くか、行くまいか思案した橋）である。これを渡り、堀留川に沿って、堀江町四丁目の道をちよつと北に行くと、次の親仁橋（親父橋。旧吉原遊郭を造った、庄司甚右衛門が架けた橋）。そこを左に折れると、照降町がある。二丁足らずの道の両側には、下駄と傘、雪駄を売る店が立ち並んでいる。雨の日に使う下駄と傘、照る日に使う雪駄を扱う、専門店街。その日の天気で出し物が異なる。そこで江戸の人々は照降町と呼ぶようになった。派手な番傘が柱伝いに屋根まで突き立てられている。ここは江戸中の評判を取り、西鶴の「日本永代蔵」

にも紹介された。さらに、日常雑貨の店が並ぶ。例えば、照降町の南裏に猿の看板。ここは、「さるや」。これも江戸に聞こえた、楊枝の専門店である。

親仁橋を潜って舟をさらに北に進めると、左岸一带は堀江町。家康は、埋め立て整備した、この土地を、漁夫の堀江六郎に与え、魚類を納めることを命じた。そこからついた町名である。江戸時代が進むにつれ、堀江町に団扇問屋が集まるようになった。やがて江戸歌舞伎の錦絵団扇が評判になる。北斎や広重が描いた団扇絵も人気のまゝ。そしてここが軽輩の武士のアルバイト、団扇張り内職の大拠点となる。この内職が年に約二百万本もあったというから、半端ではない。

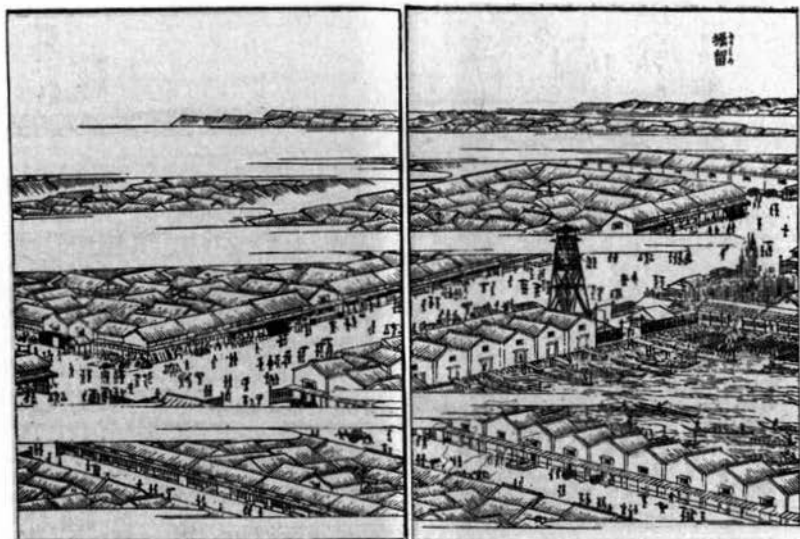
この堀江町と接し、西堀留川までが小舟町である。ここには、船積み問屋が集中している。とりわけ、鯉節、塩干肴の問屋が多く、人々は、鯉河岸とも呼んだ。有名店が多く、賑わう。明治になると、安田善治郎が両替屋

から安田銀行（富士銀行、みずほ銀行）を創設。安田財閥の出発点となる。

新材木町から浜町堀

東掘留川の右河岸に沿って新材木町が続く。楓川沿いの本材木町に対して、新材木町材木問屋の趨勢は、江戸期に、この新材木町から深川の木場へと移行していく。「江戸名所図会」で長谷川雪旦は、東掘留川の終点の辺りを事細かに描いている。堀の右岸に材木が浮かび、また、河岸の東には、沢山の材木が林立している。堀の周囲は蔵が囲み、正面、火の見櫓の後ろの道、掘留町に大勢の人が行き交う。堀の左側の道が堀江町で、そのまた左が小舟町との端境道である。掘留町二丁目南には杉森（相森）稲荷社がある。江戸時代には大変な信仰を集め、富くじで賑わった（富塚がある）。柳家小さんの「宿屋の富」は、ここを舞台にしている。

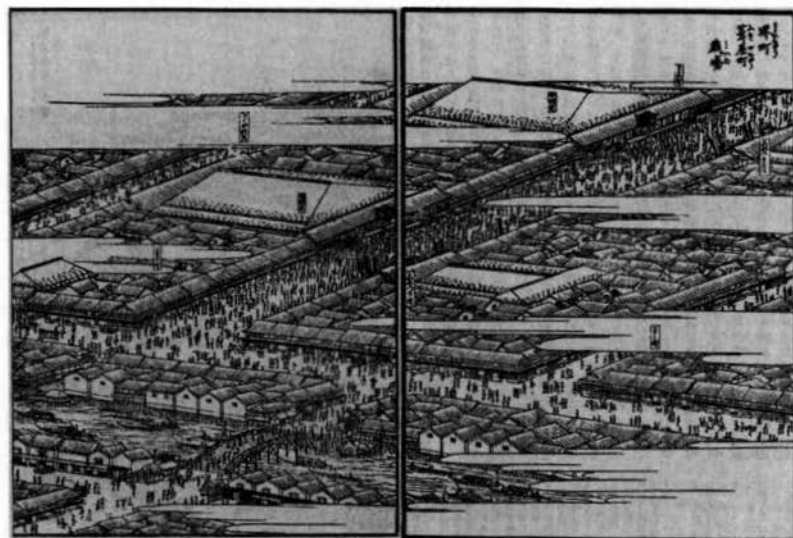
享保十二年（一七二七）、新材木町の材木



◆江戸名所図会 東掘留川終点地域の光景

問屋、白子屋の娘、お熊が番頭と不義密通の上、亭主を亡き者にしようとする事件が起った。いわゆる「白子屋お熊」事件である。裁きは岡越前が行い、お熊は、市中引き回しの上、鈴ヶ森刑場の露と消えた（増上寺山内常照院に墓がある）。彼女は大変な美貌の持ち主で、裸馬に乗せられ、鈴ヶ森へ。その時、着ていた衣装は黄八丈。荒縄でくくられた、その凄艶さは、沿道の人々のため息を誘ったと伝えられている。ために、当時の江戸の娘は黄八丈を着るのを一時控えたといわれる。その後この事件はいわゆる世話物として、浄瑠璃、歌舞伎、落語に脚色され、江戸の話題をさらう。落語、芝居の「髪結新三」もそのひとつである。

新材木町から浜町堀に至る、一帯を歩いてみよう。親仁橋を渡ると、^{よしな}葎町である。ここは江戸以前には葎が生い茂る湿地帯であった。そこからついた名。その北側が葦屋町、堺町（現、日本橋人形町三丁目）。南に銀座



◆江戸名所図会 葦屋町、堺町の芝居小屋風景 下、東掘留川の親仁橋を渡ると右、葎町。左、葦屋町。手前、市村座、右上、中村座。

がある。葦屋町は江戸初期には、湿地帯で茅が沢山採れ、これを屋根に使う、いわゆる茅葺き屋根の葦職人によってできた町。それが次第に歌舞伎のメッカに転じる。その江戸後期の賑わいは、「江戸名所図会」にあますところなく描かれている。葦屋町から堺町にかけての芝居通りには、手前から市村座、中村座が並ぶ。芝居が開いた当日の人混みの凄さ。中村座は、明暦の大火後、京橋、中橋広小路から、ここに移転。江戸歌舞伎の創始者、中村（猿若）勘三郎の伝統を継ぐ、芝居小屋である。江戸の人々は、親仁橋からひとつ北に行つた道を右に曲がり、この芝居通りに出た。辺りは芝居一色で、例えば、市村座背後の道を「楽屋新道」と呼んだ。

葦町の南隣に新両替町（銀座二丁目）から移転した銀座がある（一八〇〇年）。管理預かり人は、大黒常是。敷地約四千八百坪。ここで銀貨幣が製造された。周囲は、武家屋敷に囲まれている（日本橋人形町一丁目）。

混雑している芝居小屋の前を過ぎると人形町通りにぶつかる。人形町通りは、歌舞伎や人形芝居小屋を見物に来た庶民のおみやげに人形を作り、売る細工師の家が並んだところからついた名（この辺り一帯が人形町になった）。この通りを右にちよつと行くと、玄治店。三代家光の病気を度々救った、名医、岡本玄治（げんや）の拝領屋敷があったところである（玄治の子孫は、以後、幕末まで九代ここに住む）。屋敷の大きさは江戸後期につれ変遷していると思われる。芝居小屋が整うに連れ、この界限には歌舞伎関係者が多く住むようになる。後年、妾を開う屋敷が並んでいたそうである。そうした環境もあって、ここが歌舞伎「世話情浮名横櫓」で、お富と与三郎の情話の舞台になった。落ちぶれた与三郎が、ゆすりに入った先に偶然、今は妾となっているお富に出くわす。「いやさ、お富、久し振りだなあ……」。春日八郎の「粋な黒堀、見越しの松に……」の世界である。芝居では鎌倉の源氏店というこ

とになっている。

さらに東に行くと、大門通りに出る。江戸初期、ここが吉原の歓楽街であった。岡本玄治が屋敷を拝領した時期と、旧吉原が営業している時がだぶっているので、吉原は玄治の屋敷から東一帯、浜町堀まであったと思われる。大門通りは、吉原の中央を南北に走っていたということ、西の人形町通りの方に膨らんでいくことになる。となると、芝居小屋を過ぎると、じきに浜町堀までの方形の土地が旧吉原であったことになる。元和三年（一六一七）、庄司甚右衛門が幕府認可の元に造った、本格的な遊里。彼は、それまでは、葎の湿地帯であった葎原（よしはら）を整備し、その名も吉原と改めた。そして明暦の大火（明暦三年、一六五七）まで、ここはまさに不夜城の一大歓楽街に発展した。往時、七五名の太夫と一千人近くの遊女が華を競っていたというから驚きである。大火で焼けた後、吉原遊里は、浅草北、日本堤（にほんづな）に移転。新吉原として、その

後の江戸時代を貫く。移転後、吉原旧地は、浜町堀に沿って高砂町、難波町になった。

旧吉原の東側の堀は、浜町堀（浜町河岸）に面している。この堀は、大川の中州、川口橋から北へまっすぐ延び、小伝馬町を過ぎた辺りで西に転じ、神田堀、竜閑川（りゅうかんがわ）となってお堀に入る。ちょうど日本橋から北の町並みを囲む形で江戸初期に開削された堀である。これも江戸時代、大川からの物資輸送路として、大きな役割を果たしていた。明治になって、小唄の「浮いた、浮いたの浜町河岸に……」と歌われる、粋な場所柄になった。これも元吉原の雰囲気を引き継いでいる。

浜町堀に沿った、元吉原の北側が富沢町である。江戸初期、鳶沢甚内がこの地を拝領し、古物市を開き、古着問屋で知られるようになった。鳶沢がなまって富沢になったという。元吉原の古地図ではすでに富沢町と記述されている。一説によると、甚内は元盗賊であった。当時は無頼の輩が横行し、できたばかり



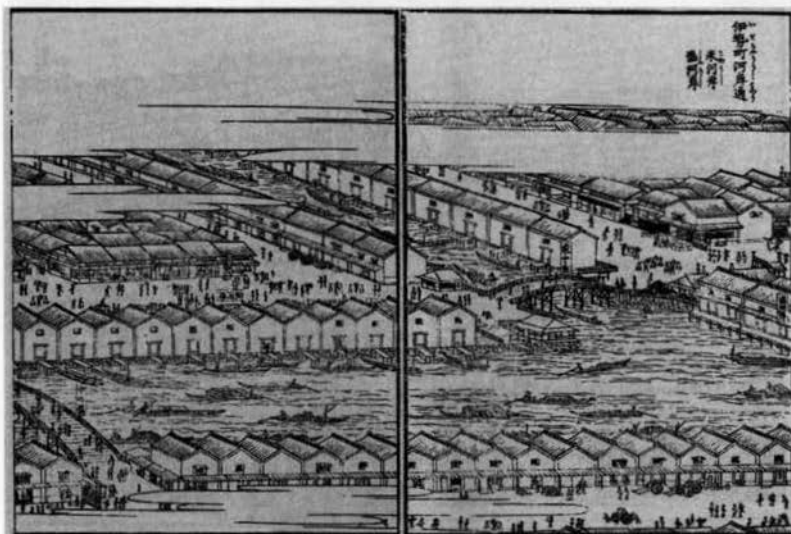
◆広重絵 「大てんま町木綿店」。

の幕府は、取り締まりに手を焼いていた。そこで家康は「蛇の道は蛇」とばかり、甚内に盗賊密偵の役を申しつけ、彼も大いに協力したので、この土地を与え、古着屋を生業とさせたという。佐伯泰英の小説「古着屋総兵衛影始末」は徳川を守る影として、鳶沢一族の活躍を描いている。

優雅な浜町堀の流れを眺めながら北に歩くと、通油町がある。浮世絵の大版元として洒落本、狂歌本など様々な出版物を発行し、歌麿や写楽を世に送り出した、葛屋重三郎の耕書堂があつた処である。彼は多くの文化人と知己で、新人を発掘し、大変面倒見が良く、喜多川歌麿などは耕書堂に下宿していたそうである。

通油町の通りを西に歩くと、大伝馬町に出る。丁度、東西掘留川の北側に位置する。こもめんだなは木綿店が軒を並べている。

そして大伝馬町の北側に小伝馬町牢屋敷がある。小伝馬町一丁目の通りから北裏手の神



◆江戸名所図会 西堀留川。左中之橋、流れは、突き当たり（塩河岸）、左に折れる。道淨橋。左中央、米河岸の後ろが伊勢町、瀬戸物町。下が小舟町。



田堀までの縦方形敷地約二千七百坪。表門は東側、裏門は西側にあった。差配は代々、石出帯刀。火事の時には、囚人の解き放ちが行われた。明暦の大火の時には石出帯刀が独断で囚人を避難させたが一人の脱走者もなかったという。時代劇でお馴染みの「小伝馬町送り」の場である。幕末、ここに吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎などそうそうたる人物が送り込まれた。安政の大獄である。「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」（松陰辞世句）。

西掘留川

江戸橋を渡り、日本橋川の北側に出ると、左手は日本橋まで魚河岸の賑わいを目にする。右を見ると、西掘留川の最初の橋、荒布橋である。川を上ると、次の橋が中之橋。左は米蔵が続く、その西は伊勢町、本小田原町、瀬戸物町の町並み。右側は小舟河岸、小舟町である。伊勢町には米会所があり、大店が軒

を連ねた。嘉永六年には一丈七尺に及ぶ大イ
ルカの見世物がでたという。この町の雰囲氣
を良く現している。西掘留川は、突き当たると
道淨橋を潜つて西に折れ、行き止まりとな
る。沢山の舟が行き交う。堀から上がると浮
世小路。ここは飲食店が軒を並べ、掘沿いの
稲荷側にあった、懷石料理、「百川」は江戸
の超有名な店。卓袱料理のはしりともなり、天
明年間（一七八一〜八九）には文人墨客の文
化サロン。安政元年には、ペリー一行を幕命
千両の予算で饗応したという。落語「百川」
は、この店を舞台にした咄で、六代目円生の
十八番。生前の声が耳に蘇る。短い浮世小路
を西に行くと、日本橋から来る、室町三丁目
の大通りに出る。道を挟んだ前方に越後屋
（三井呉服店、三越）が見える。この通りを
右に曲がり北に歩くと、本石町十軒店。桃の
節句前には雛市が立ち、雛人形を求める女性
達で大変な賑わいである。

按針町

日本橋魚河岸の北に按針町がある。家康よ
り三浦按針ことウイリアム・アダムスが屋敷
を賜った処である。この英国人航海士は大変
数奇な運命の持ち主で大航海の末、慶長五年
（一六〇〇）、豊後臼杵（大分県）に漂着、家
康の知遇を得る。家康は彼を大切に扱い、外
交顧問として処遇。その功績により、ついに
は旗本に取り上げられる。一六〇九年、ヌエ
バ・エスパニーニャ（メキシコ）のガレオン船
が上総国岩和田（千葉県御宿町）沖で座礁。
処の漁船が一斉に出て三百十七名を救助。体
温の下がりを防ぐため、海女さん達が裸にな
って抱きしめ、彼らの命を救った。当時の岩
和田は寒村。収容しきれぬので、近くの大多
喜に応援を頼む。時の大多喜城主は徳川四天
王の一人、本多忠勝。彼は一行を快く引き受
ける。そして、家康の謁見するところとなる。
家康は一行を歓待し、船の建造を按針に命令。

若かりし頃、有能な造船技師であった彼は、伊豆伊東で百二十トンの船を造る。家康は帰国に際し、この船を提供。別に四千ドゥカドの支度金も添えた。船は、無事に太平洋を横断し、彼らは帰国できた。一六一年、メキシコは、ビスカイノを特使として日本に派遣。借入金を返済し、西洋式置時計を家康に贈った。これが日本で初の機械仕掛けの時計伝来である。二〇〇九年は、御宿沖での難破から四百年。盛大な日本とメキシコの修好四百年祭が御宿と大多喜市で行われる。按針は、航海術、幾何学なども幕閣に教えたこととされ、豊富な知識と高い知性の持ち主であったことが分かる。ついではがらスウィフトの「ガリバー旅行記」の主人公は、アダムスに想を得たとも言われる。それにしても家康の度量の大きさは並大抵ではない。余談だが、按針が豊後に漂着したとき、同じ船に乗り合わせていたオランダ人がヤン・ヨーステンである。彼も家康に信任され、屋敷を賜った。ヤン・

ヨーステン（耶楊子）、八重洲の語源である。

【参考文献】

「江戸明治東京重ね地図」（株）エービーピーカンパニー。中川

恵司編。

「江戸史跡事典—新人物往来社

「中央区史跡散歩」学生社

「江戸切絵図を読む」東京堂出版

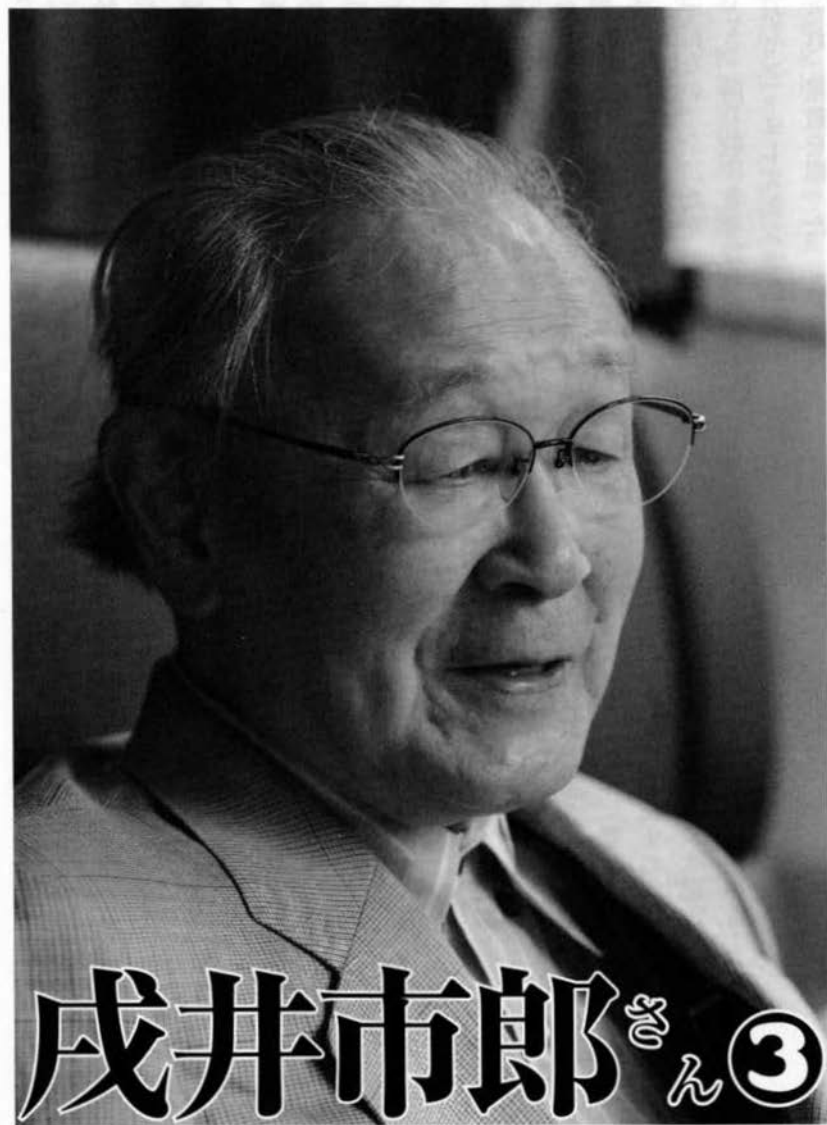
「江戸名所図会」角川書店

「広重の大江戸名所百景散歩」人文社

「条約から条約へ」墨田関係史ノート メキシコ大使館

連載

会いたい人 関 容子



成井市郎さん③

撮影／タカオカ邦彦

このあたりで戌井さん自身の恋愛と結婚について語っていただく。多感な青年演出家が、美しく聡明な女優たちといつも顔を合せているのだから、さぞやと思われる。

「結婚の相手はできれば自分で探したかったのですが、その相談相手はもっぱら中村伸郎でした。彼はとても面倒見のいい男だったのですね。アミさん（丹阿弥谷律子）はどうだろう、と言うと、ダメだよ、宮口精二が先口で、もし一緒になれなかつたら坊主になると言ってるぞ、と教えてくれた。しかし結局は宮口も振られて、アミさんは金子信雄と結婚したんですけどね。それから『陳夫人』（森本薫）を新派が上演することになったとき、演出の久保田万太郎先生にはいろいろ訊けないことを演出助手のわたしには訊きやすかつたらしくて、桜井沙子が接近してきた。それを勘違いしたのかな、彼女はどうかろう、年は向うが上だが、と言うと、よし、聞いていてやる。それで何日かしたら、お前、伊志井寛によれ

ばあの人は花柳章太郎の彼女だそうだが、話にならんよ、って（笑）」

その後しばらくして、ある日戌井さんは久保田万太郎から呼び出された。

「先生の机の上には書きかけの戯曲の原稿があつて、この幕切れはもうできてるんだ、十三夜の月が登り始めて、幕、つてね。先生はいつでも幕切れが先にできるんです。多分この芝居は『波しぶき』ですね。それから先生がわたしに女の人の写真をそれとなく手渡したんですよ。この人が文学座に入りたがつてるそうだけど、君、どう思う？ さあ、素質さえあればいいんじゃないですか、と答えて出てくると、中村がニヤニヤして待っていて、万太郎に写真見せられたらう？ うん、女優志願だろ？ 違ふよ、お前の嫁さん候補だよ、って。つまりハメられたんですな（笑）」

昭和十八年、戌井さんは五つ年下のその女性と結婚。二十八歳のときだった。戌井さんが演劇の道に入るきっかけを作った秋田雨雀

戌井さんの母校、名門だった京都銅駄小学校、昭和八年の同窓会。
当時京都第二商業中学に通っていた戌井さんは前列左から二番目



上の写真と同じ京都銅駄小学校の同窓会、銅四会の卒寿の集い。
平成十九年に京都・本屋町の料亭で開かれ、戌井さんは前列右端。
ちなみに他の男性三人のうち二人が上の写真にも写っている



が、その日記に戌井さんの婚礼の日のことを書いている。

〔三月十五日。晴。正午十二時から大東亜会館（東京會館）で戌井市郎右衛門君の結婚披露式があった。新婦は静岡の人で、美しい人だ。久しぶりで戌井の祖父にあたる喜多村緑郎君に逢った。花柳章太郎や森雅之に逢った。〕

結婚直後、戌井さんはまたもある女優にボツとなつて、杉村春子に迷惑をかけたかもしれないそうだが、一男二女に恵まれ、平成十三年に夫人が八十歳で亡くなるまで、無事に結婚生活を全うした。

ところで毎年多くの俳優志願に接して、演出家はその資質をどこで見分けるのだろうか。

「やっぱり強烈な個性ですね。卒業してゆく研究生の中で残るのは、現有勢力を見て、そこにないタイプです。その中でまた、せりふ

がきちつとしゃべれて、芝居ができる、ということがないと上へあげられません。杉村さんはとにかく美人は残しましょう、と言つてました。お客を呼ぶのは美人だから、って。女優でそういうことが言えるのは偉いですよ。稲野和子、宇都宮雅代、小川真由美なんかは、綺麗ということで役をつきました。太地喜和子のことは美人とは言わなかったけど、変つてて面白い子よ、あの子、って、早くから注目してましたからね」

太地喜和子は昭和四十二年に俳優座の養成所を経て文学座に入った。面接試験の順番を待つときからキョロキョロして落着きがなく、足をバタつかせたり笑ったりしてひどく目立つ存在だった、と以前に北村和夫さんから伺ったことがあった。これも強烈な個性の現れなのだろう。

「喜和子は二十三歳くらいで入つて来たんですが、年齢よりかなり成熟した大人に見えるでしたね。俳優座で三年勉強しているので、い

一九八一年、中国の紫禁城にて太地喜和子さんと



きなり準座員の扱いでした。翌年の四月が彼女の初舞台『美しきものの伝説』（宮本研）の突然坊の役で、これはギターを抱えた三人のコーラスガールが客席に降りて歌うんですけど、愛嬌があつて、お客をグイグイ魅きつける。これはいい女優になる、とすぐに思いました」

昭和四十五年『あわれ彼女は娼婦』（ジョン・フォード）の、兄に恋する娘アナベラ役は、純粹で可愛くて危険で一途という、太地喜和子そのものに重なるような鮮烈な舞台として、観た人たちは今も熱くその印象を語り続ける。

「最初あんなに大人に見えた彼女が、あどけない処女になり切っているのに驚きました。喜和子は平成四年の十月に四十八歳で事故死するんですが、文学座に在籍した二十五年の間に、わたしが演出した作品に彼女が出たのは十本ありますね」

その十本とは『にこりえ』『華々しき一族』

『丸山蘭水楼の遊女たち』『おりき』『吾輩は猫である』『華岡青洲の妻』『遊女夕霧』『好色一代女』『出雲の阿国』『唐人お吉ものがたり』で、『にこりえ』と終りの四本は太地が主演。まるで新派の演目のようだ。

『遊女夕霧』（川口松太郎）は、花柳章太郎の舞台のフィルムを喜和子が見て、どうしてもやりたいと言いつ出した作品だけに、なかなかよくやっていたと思います。続いて『佃の渡し』（北条秀司）にも食指を動かしたんですが、これは新派の二代目水谷八重子が持ち役になっているもので、さすがに文学座でやりたいとは言いつ出せなかった。『好色一代女』（八木柊一郎）の時枝るいは、作者が彼女にあてて書き下したもので、わたしは当り役の一つだと思つてます。最後の舞台になった『唐人お吉ものがたり』の翌年に再演が決つていて、お吉の公演中にボスターまで撮つてたんですが、あんなことになつてしまつて……」

戊井演出の『女人哀詞——唐人お吉ものがたり』（山本有三）は、それまでに初代水谷八重子や板東玉三郎のお吉で何度か上演されているが、やはりホームグラウンドの文学座で、思う存分演出の腕を振るつてみたくなつたという。

「まず『女人哀詞』の題を外したのは、お吉が権力に逆らつて屈した女なら『哀詞』かもしれないが、お吉は鶴松の出世のために一時の別れを忍んで、その後二人で所帯を持つことを夢見ていた。しかし男に裏切られる。お吉の男不信はいよいよ募る。お吉をとことん男に尽す女の『物語』として描きたい、と思つたわけです。この役は喜和子以外に考えられない、と彼女に言う、是非是非、男に尽すところはあたしと同じだね、と言うから、しかし喜和子は男不信じゃなくて、過信だらう？　と言つたら、ちよつと小声になつて、今のところ、そうかもね、ワーハッハッと破顔一笑してました」

それから一年半の準備期間に、太地喜和子は劇中で弾き語りをする新内の稽古を始め、また後半生は髪結いになるので、これも習いに通っていた。

「平成四年八月に三越劇場で初日をあげましたが、喜和子のお吉は好演でしたね。いつもなりふり構わずにハートで熱い芝居をする彼女が新派みたいに形を気にする傾向が出始めていましたけども、前半の役柄は芸者だからそれも大事と思って、気にしないことにしました。後半、自暴自棄になる酒乱の芝居はさすがに鬼気迫るものがあって、それはみごとな舞台でしたね」

戌井さんが太地の死を知らされたのは、巡業先の伊東市内のホテル。十月十三日早曉の電話で起され、車が夜の海に落ちて亡くなった、と告げられた。

「ひどい衝撃を受けましたけど、すぐに代役のことを考えた演出家としての自分の性^{さが}に呆れましたね。翌日の下田公演は不可能でも、

十六日からの東北巡演は、おさいの役で出ていた小野洋子に決めると、遺体の安置してある警察署から東京へ連絡をとってました。劇団葬は十五日、信濃町の文学座アトリエでしたが、その間に別の場所で代役の素稽古をして、葬儀の飾りつけが撤去されると入れ替りに『お吉』の大道具を搬入するトラックが入ってきて、もうそこで舞台稽古です。小野は短時間に膨大な量のお吉のせりふをよく覚え、新内の弾き語りや髪を結うこともあつという間にマスターしました。いざとなると信じられないような力を出す。これも役者の性ですね」

杉村春子は太地の劇団葬で思い切り泣いていた。当り役の『欲望という名の電車』のプランチや『鹿鳴館』の影山朝子や『華々しき一族』の諏訪なんかも信頼する太地が行く行くは、と思っていただけにその口惜しさはひとしおだったろう、と戌井さんは思っている。

「喜和子は杉村さんを心から慕ってましたからね。文学座の裏の杉村さんのお宅に、正月なんかずつと入り浸ってましたし、杉村さんも娘のように可愛がってました。見たところお互いに孤独のようではあったけど、あの二人ほど芝居が好きだった人間をわたしは知りません。芝居に生きる人生をあれほど謳歌したんだから、もって銘すべきと言えるでしょう。」

太地が再演するはずだった『好色一代女』の「一代女」とは、夫も子もない一代限りの女という意味で、西鶴の言う「好色」とは、色香とか粹すいとかいう肉体の欲望を超越した二ユアンスを含んでいる。

「喜和子の人生はまさに『好色一代女』でした。芝居は、侘び住居を訪れた男二人に老女がわが身一代の情事を語り聞かせる、というものなんです。酒に乱れて語るうちにどんどん若く美しく見えてくる。わたしは冥界の喜和子がこの色っぽい老女の姿に重なるん

です。この芝居を喜和子の追悼公演としてわたしが出たことは、冥利につきますね。ただしわたしは酒がダメなので、喜和子と酒のつきあいができなかったのが心残りではあるけれど」

戌井さんは芝居を演じる俳優たちの劇的人生を長年見つめ続け、卒寿を越えた今もなお現役の演出家として活躍中だ。この元氣と活力はどこからくるのだろう。

「さあ、別に何の健康法もありませんよ。自分が今いくつなのか考えてない、のん気なところがいいんでしょうかね」

ここでふと詩人堀口大學のエッセイのこんな一節を思い出した。

慢性小児病。芸術家がかかりやすい。患者の精神と肉体の双方が「時間」に置き去られ、老後も童顔。旺盛な老人のことをVieillard jeune（グリーン、老人）という……。

そう言えば戌井さんは、喜多村緑郎の孫だった。

（この項終わり）

五つの決定を以て往生すと云う事。

一つには弥陀の本願決定なり、二つには釈迦の所説決定なり、三つには諸仏の証誠決定なり、四つには善導の教釈決定なり、五つには我等の信心決定なり。此の義を以ての故に往生決定なり。

(『三心料簡および御法語』)

五つのゆるぎない事実によって往生する、ということについて。

一つには阿彌陀さまが私たち凡夫を救おうと誓われた本願が成就されているという事実、二つにはお釈迦さまが説かれた教えが真実であるという事実、三つには阿彌陀さまの本願をあらゆるみ仏が証明されているという事実、四つには善導大師のご解釈が正しいという事実、五つには私たちの信心が確固たるものであるという事実。これら五つの事実によって往生は必ず定まるのです。

投機——かくもこの世は不安定——

去る九月十五日未明、アメリカ証券会社四位のリーマン・ブラザーズが、アメリカ史上最大の六一三〇億ドル（約六四兆三六〇〇億円）の負債を抱え、会社更生手続きの適用を裁判所に申請、経営破綻しました。昨年八月に表面化した低所得者向け高金利住宅ローン（サブプライムローン）問題が、ついにアメリカを代表する老舗の大手証券の経営破綻にまで発展したのです。昨今の穀物不足・ガソリン料金高騰問題を引き起こした、お金をもてあそぶマネーゲームの一つの結末でもありましょう。この事態を受け、日本はもちろん、世界経済への波及が強く懸念され、順次、その対策が具体化されています。皆さま方の中には、今からちやうど十年前の一九九八年に自主廃業した山一証券のことを思い出された方も多かったのではないのでしょうか。そんな中、ふと「投機」という言葉が思い浮かびました。

投機とは、価格の変動がある商品や有価証券に対して、市価の変動を目論んで、その間の売買による利ざやを得るために行う取引行為です。要は、安い時に買って高い時に売り抜ける、もしくは、高く売って置いて安値で買い戻すことによって利益をあげるのが目的です。また、うまく機会をとらえたり、ヤマをはったりという場合にもこの言葉が使われています。「思索・推測」の意味

が含まれる「スペキュレーション」の訳語として採用されました。

このように、今でこそ経済用語として広く用いられている投機ですが、元々は仏教の言葉で「師匠の心と弟子の心とが通じ合い、意気投合すること」を言いました。そもそも「機」とは、人の心のなかにあって、なにかの縁によって生じてくる可能性のことで、仏の教えに触れることによって動き出し、最終的には悟りの境地へとたどり着くことのできる素質や能力のことです。つまり、「弟子の心に芽生えた悟りへ向かう心の動きを師匠が見逃さず、悟りの境地へと自ずから導くこと」を投機と言うのです。不確かで予想が困難な市価を見逃さず、利潤を得ようとする行為に「投機」を充てたのは実に絶妙な判断だったのです。

とはいえ、現代科学の粋を集め、多くの人々の英知を尽くした結果が、目前の経済界の混乱に他なりません。「一寸先は闇」とはよくいったもので、私たち人間は、自身の明日の命さえ、一〇〇%の保証を約束されている者など、ただの一人もいないのです。かの弘法大師空海は「生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し」(『秘蔵宝鑰』)と、私たちはどこから来てどこに行くのか、前世も後世も、まったく知り得ない存

在であると吐露されています。

このように、自分自身のことさえ満足に知り得ない私たちであることを棚に上げて、ましていわんや、千変万化する弟子の心の動きを予測し、自身も成し得ないような悟りへと導く瞬間を見出すのは並大抵のことではありません。否、法然上人に言わせれば、そんなことはまったく不可能なことでした。

法然上人にとっては、阿弥陀さまの前でわが身の至らなさを振り返り（信「機」、そんなわが身・わが心のすべてを阿弥陀さまに「投」げ出して救いの働きにあずかることこそ、「投機」と呼ぶにふさわしい行為であったことでしょう。なぜなら、諸行無常のこの世において、市価を完全に予測したり、弟子の心の動きを予測して悟りへと導こうとすることなど私たちには到底不可能で危なっかし、割に合わない「投機」であるのに対し、一〇〇%約束された阿弥陀さまの広大な救いの働きに、煩惱多きわが身を投じることがこの上なく尊く有り難い「投機」に他ならないからです。

冒頭の法然上人のご法語にあるように、はじめの四つの「決定」は既に成就され、私たちの眼前に今も提示されています。あとは、最後の私たち自身のお念仏への信心を「決定」できるかどうかです。合掌

（林田康順）

法然上人
とその
時代

シリーズ第五章

壇ノ浦

第四回

作

石丸晶子

画
アーサ



十

「源氏の侍ども、われら平家方の先陣三百艘の水主ならびに梶取りどもを一斉に射殺し、切り殺しはじめました。秀遠殿は御討ち死に、先陣は総崩れとなっております」

乱戦の海上を掻き分け掻き分け、前線で戦う平家方先陣の小船一艘が、後方の平家本陣で総指揮を取る知盛の船に漕ぎ寄せるや、戦いの様子を見守っていた知盛に叫んだ。

とその叫びが終わる間もなく、さらにまた一艘の小船が平家本陣に漕ぎ寄せ、

「われらは鎮西九党、肥前松浦の党の者にございます。第二陣百余艘のお味方苦戦。源氏の彼奴らは水主、梶取りどもを殺す戦法に出ました」

真っ赤に日焼けした顔に返り血をあびた待は、知盛の前に手を付くやそう喚いた。

「後詰四陣、民部はどうしたッ」

それまでひたすら前方の戦況に目を凝らし

ていた知盛は、そういうと背後の海に二百余艘を以って控えているはずの民部の船団に目をやった。

とその時、彼の目に映ったのは、後詰四陣の侍たちが二百余艘の船べりに一斉に肩を並べ、帝の御座船を囲み守る本陣二百余艘に向かって、まさに矢を射かけようとしている姿であった。

知盛はハッとした。大小敵味方数千の船が入り乱れ、戦い乱れる目の前の海上の光景が、突然色を失い、知盛の意識からみるみる遠ざかっていった。

——夢か。夢を見ている……。

激しい眩暈を感じて彼はそう思った。

空からは春の午後の穏やかな太陽の日差しが、修羅の巷と化している海上の光景など知らぬげに降りそそいでいる。

彼を取り巻く目の前の海上の光景は、遠く彼方に繰り広がる走馬灯でも見えているようであった。



が、次の瞬間、知盛は我に返った。

「裏切ったな、民部」

血が凍りつくとはこの時の知盛をいうのであろう。

「民部め。民部の奴め」

知盛は低く叫んだ。叫ぶというよりも、それは呻きに近かった。

潮の流れは、少し前から西流に変わり始めている。

知盛は平家の敗北を悟った。

彼は本陣本船に乗る周りの侍たちには目もやらず、次の瞬間、小船に飛び移るや、敵味方が互いに射掛ける矢数の中をかいぐり、小船から小船を帝の御座船ござせんへ向かって跳び渡って行った。

「女房方、見苦しきものはみな、海にお沈めください」

御座船へ着くと知盛は叫んだ。

不安と恐怖にかられ、日焼けした顔を蒼白にした女房たちは、波に揺られながら船の一

つところに身を寄せ合っていたが、ふいに知盛が現れたのを見ると、互いにホッとした様子で知盛に取り縋り、口々に尋ね叫んだ。

「戦況はいかがであります。お味方は勝っておりますか」

「早う早う、勝利してください。このままであれば生きた心地もいたしません。死んだほうがまだましじゃ」

「おお、おお、怖ろしい怖ろしい。地獄じゃ、地獄じゃ」

口々に言い募る女たちに向かって知盛は、
「戦はもはやこれまでと思し召せ。平家の運命は今、この戦で尽きました。今日以後は、珍しい東男オウナリを御覧になることになりましょうぞ」

そう言い放つと、彼はみずから船内を掃除し始めた。

「総大将ともあろう御方が、この期に及んで何をなさる」

「平家が負けるなどと何というご冗談をおつ

しやるのです。帝をはじめ奉り、我らはどうなりますか」

「われらはどうなるのじゃ」

女房たちは口々に泣き叫び、喚き叫んだ。

十一

この時、安徳天皇は数えの御年八歳。六歳にして平家の都落ちに同行させられ、以来、丸二年に及ぶ波の上のご生活であつた。

幼児ながらに不安と苦しみ多い年月を経てこられたからであろうか、早くから御聞き分けよく、御年よりも大人びておられた。御髪はゆらゆらとお背中の下まで垂れておられたという。

御顔立ち美しく、聡明な童児であられた。

清盛の妻・二位の尼時子は御座船にあつて終始帝を傍らに抱き、女ながらも目をこらして戦況を見守っていたが、周囲の戦況、たしかに平家は総崩れである。

大船小船、平家の船団は漕ぎ手を失つてた

だ波に揺られ漂い、かと思ふと潮の流れに流されて、早瀬の瀬戸を狭い壇ノ浦へと流されていく。

そんな平家の大船小船を追つて、源氏の兵たちが飛び乗り、乗り移り、波に揺られながら狭い船上を戦いの場として、喚き叫びつつ互いに血しぶきをあげて切り合い、殺し合っていた。

海上におけるその凄まじい乱戦はもう御座船のすぐ側まで迫っている。

時子は孫である八歳の安徳天皇を抱いた。離れ離れにならないように、天皇と時子の体は、帯で二箇所、しっかりと結わえつけられている。

時子は腰に草薙の剣を挿し、脇には八尺瓊曲玉まがたまを挿した。

草薙の剣、八尺瓊曲玉は三種の神器のなかの二つで、帝王のしるしであるこの神器二つを、平家が敗れても京都の朝廷にも源氏にも渡すまいとの覚悟であつた。

彼女は弔意をしめす鈍色にびいろの衣を頭から被ると、船内を歩きやすいように長袴ながはかの裾を高くたくしあげ、しずしずと船端に歩み寄るや女房たちに呼ばわった。

「我が身は帝の御供にまいる所存である。われら女なりとも敵の手にはかかるまいぞ。帝の御恵みに浴そうと思う者は急ぎ御供にまいられよ」

時子のこの呼びかけに、みなみな身悶えして泣き悲しみながら、側近の女房たちが船端に近寄ってきた。

帝の御母・建礼門院、関白このえもとみち近衛基通の妻完子きただ、臍うろの御方おなたなどの清盛の娘たち。

帝の御乳母帥おんめのそちの典侍。

同じく帝の御乳母大納言だいなごんの典侍。

御座船に乗り合わせる側近の女房たち。

「尼御前あまごぜ、私をどこへ連れていくのか」

取り囲む女たちが身悶えして泣き悲しむのにびっくりされたご様子で、幼い帝は祖母二位の尼に尋ねた。

滂沱ほうたとした涙のなかで時子は帝に言った。

「帝は未だご存知ではありません。前世で積まれた十善戒行の御力によって、今生において、帝は万乗ばんじようの主とお生まれになりました。しかし悪縁に引かれ、御運がすでに尽きてしまわれたのでございます。でございますので、今、わたくしは帝が西方浄土への御旅にお発ちになる御供をいたす所存でございます。この現世は娑婆世界と申して物憂き所でございます。この波の下にこそ、極楽浄土と申してめでたき都があるのでございます」

——とさまざまに慰め参らせしかば、山鳩ぎよいいろの御衣ぎんに髪みづら結むすわせ給いて、御涙におほれ、小そう美しき御手を合わせ、西に向かわせ給いて御念仏ありしかば、二位殿、やがて抱き参らせて、千尋ちひろの底にぞ沈み給う。

平家物語

十二

あつという間の眼前の出来事であつた。

それを見てハツとした建礼門院はじめ御座船の女房たち何人かが、次々に海中に身を投げた。

身を投じようとして、着ていた袴の裾を矢で射られ、船板に釘付けされたまま、源氏に生け捕られた女房もいた。

しかし、帝の後に続くことが出来ず、茫然自失のさまで震えたまま船端にうずくまった女房も多かった。

一方、狭い壇ノ浦の一つところに海流によつて寄せ集められた平家方の大船小船では、このときすでに、多くの平家方侍は討ち死にしたり海中に身を投じたり、あるいは逃走したりして、その姿は少なくなっていた。無数の源氏方侍たちが船から船へ飛び廻る姿が目立っていた。

入水したものの、衣が海中で花開いたこと

くに広がり、浮き袋となつて千尋の底に沈んでいかず、海中に身を投じるや建礼門院は目の前に浮かぶ小船の縁に掴まろうともがいた。如何ともしがたい生存意欲が湧いてきたのであつた。

「誰ぞ女房が浮かんでおるぞ」

源氏の侍が叫んだ。

「熊手で引き上げろや」

そう源氏の侍たちが口々に喚く中、建礼門院の長い髪は熊手に絡めとられ、体は衣ごと船に引き上げられた。

敗北すでに明らかな中、清盛の第二人・平中納言教盛と修理大夫経盛は手に手を組んで海に沈み、小松家の資盛、有盛、そして従弟の行盛も互いに手を手に取り組み海に沈んでいた。

教盛の次男で平家切つての強弓を引き、さらに大力の教経は、源氏の船に乗り移り乗り移り、散々に太刀を振るって多くの兵士をなぎ倒していたが、やがてかかつて来た敵二人

を脇に挟み締め上げ、

「わぬしら、わが冥途の旅の供をせよ」

と言うやいなや、海中に身を投げた。

御座船にいる宗主の宗盛は、帝と二位の尼、建礼門院が入水。次々に平家一門はじめ將兵たちが海に身を投じるのを見ても、船端に立つて茫然としているばかりであった。

彼自身は一向に身を投じる様子がない。

「憎つくいことよ。かかる御仁^{ごじん}を大将に頂いてわれらは戦したのであったか」

宗盛の傍らで戦っていた侍数人はそう叫ぶと、宗盛を海に突き落とした。

源平双方の船に飛び乗り乗り移り、これらのことを目に収めつつ、矢を射り、太刀を抜いて戦っていた知盛にも最後の時が来た。

「見るべき程のことは見つ。今は自害せん」

彼はそういうと、乳兄弟の伊賀の平内左衛門家長と二人、鎧を二領重ね着て手を取り組み、海に沈んでいった。

知盛には常日頃「生死ともに一所に」と誓

い合った侍たちがいた。これを見た彼ら二十余人はみな手を取り組んで海に入った。

多くの者がみなみな、一人では死のうとしなかった。互いに手を組み、抱き合い、海に沈んでいった。

——海上には赤旗、赤印、投げ捨て、かなぐり捨てたれば、龍田山のもみちの風に散るがごとし。なぎさに寄する白波も薄紅にぞなりにける。むなしき船は風にまかせて、いづくともなくゆられ行く。

平家物語

(つづく)

浄土誌上句会

●花野

〔特選〕 玫瑰の実の二つ三つ花野駅

井村 善也

駅を出ると草花の咲き乱れる野が広がっている。その駅に玫瑰はなざわが実をつけているが、国の北部、海岸の砂地に群生する低木である。草花が売り物の地の、それも目のつく所に、何気なく持つてくる無神経さを捉えたのだ。

〔佳作〕せせらぎの一筋光る花野かな

河合富美枝

大花野ときどき雲のかたち見えて

浜野 具円

川風に勢い見せし花野の蝶

石原 新

●夜食

〔特選〕 夜食とる育ち盛りの孫がいて

佐藤 雅子

秋の夜食と言ひ食欲の秋という。遅くまで起きていると、何となく口寂しくなってくる。育ち盛りの子供たちにとって、空腹はたまた

ない。そろって夜食をとる。この家では夜食も夜ごとの習慣になっているのだろう。

〈佳作〉

カツ井と決めし土曜の夜食かな

中島富士子

宿題や夜食の膳に栗三つ

鳥羽 梓

夜食にとぬくき鯛焼き届きけり

増田 信子

●自由題

〈特選〉

円空の仏美男や里の秋

谷 しげ子

丸木を削ったままの素材に荒削りという彫法は、円空独特のものとして親しまれているが、いま作者の目の前にあるのは、珍しく美男の相をしているのである。そのにこやかな顔をしみじみと見つめているのだ。

〈佳作〉

高架駅いま袈裟懸けの秋日かな

内藤 隼人

いかずちの火柱ひとつ島を射ぬ

さとうゆう

石垣に頭さしこむ蛇の皮

中村 真一

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

(兼題ではありません)

自由題

誌上句会 〈編集部選〉

■花野

あかあかと錆びて花野のフリス盤 長谷川裕
故郷へと逃げる途中の花野かな 小林苑を
大花野あちこちに立つ方位盤 浜口佳春
炭塵の街に生まれて花野あり 三宅月彦
花野からおいしい煙来たりけり 狭山 掉
小さき花野日曜画家の二人ほど 鈴木真理子

■夜食

遅く帰る子の御夜食に濡布巾 中島富士子
痴話喧嘩止みて夜食の匂いかな 井口 葉

締切・二〇〇八年十一月二十日

発表・『浄土』二〇〇九年一月号

選者・増田河郎子(「南風」主宰)

応募方法

- いずれの題とも数の制限はありません。
- 特選各1名・佳作各3名
- 葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

淋しかり夜食のあとの愛国者
旋盤に油をさしてから夜食
急な雨来て夜食の箸止まる
惣領の甚六として夜食喰ふ

■自由題

鳴く虫にせかされてある夕厨
麦茶飲んで午後の法話を待ちにけり
変らざる山河ころに素風かな
廃校へ続く道あり萩盛る
ひぐらしや海峡をゆく白い船
野焼きする煙ゆつたり秋の雨
鉛筆の短きを手に秋澄めり
稲光三回までは数えたり
開いたら軽くなりたる秋日傘
西風吹くや明るき沼に糸を垂れ
林道に楽器の落ちている良夜
朝顔のへろへろと咲く父の死後
新涼や骨のかたちのまま歩く

浜野東人
斉田 仁
浜野具円
内藤隼人
金谷友江
河合富美枝
中島富士子
佐藤雅子
寺下忠至
大倉智子
西原天気
鈴木真理子
狭山 掉
鳥羽 梓
浜野東人
斉田 仁
中嶋いづる

さっちゃんね

55 かい目

かまちのころ



酔いしれて忘れた頃の寝待月

岱潤

先日山形の米沢市に行ってきた。私は全く知らなかったのだが、来年のNHK大河ドラマの主人公が、米沢藩の家臣直江兼統だそう。私などは米沢と言えば、先月号で書いた九代藩主の上杉鷹山しか名前が挙がらないが、米沢の人なら誰でも知っているということで、町中がその話題で一色であった。

今回多少時間があつたので町の中を歩いてみると、さすが上杉由来の場所ばかりで、兼統は初代と二代に仕えた家臣であり、鷹山とは二百年も違う時代の人であるのだが、その仕事や業績が似通って

いて、その政治力は現代の手下にも成るのだろう。米沢の町づくりをした人物であり、はっきりとものを言った人物として有名だそう。

ただ何故彼が大河ドラマの主役になり得たのかといえば、その理由は彼の兜にあるようだ。なんと「愛」という大きな文字が正面に付いた兜だ。私も本物を見つけたが、ちよつとびっくりする兜だ。ここから「愛の人兼統」が強調されるのだろうが、私には疑問だった。その当時の「愛」の意味は今のような意味ではなかったはずだ。もちろん説明にも『愛染明王からとった』となっている。愛染明王は怨敵退散の力のある明王だ。家族愛

は出てこないと思ってしまう。しかしお墓に行くと驚いた。この時代に見事な夫婦墓だった。意外とドラマ的な人なのだろう。また、大河が楽しみなった。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤寛道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十四巻十一月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十年十月二十日

発行 平成二十年十一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了悟

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三)五七八六九四七

FAX 〇三(三三)五七八七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
藤谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大亮(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養蓮寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

随ずい其ご時じ節せつ

その時節に従いて
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

人一生の各時期は、独自の価値を持つ。

北風、結氷、雪崩。なだれ冬の厳しい自然は、冬の素適さも人に彷彿させます。雪化粧の庭に寒椿、冬毛の子猫、ビチビチ跳ねる寒ぶり、冬支度には家庭の温もりが感じられます。

インドでは、人の一生を学生期、家庭期、林住期、遊行期の四期に分け、独自の生活目標を示唆。『論語』も、十五歳で志学、三十歳で立身、四十

歳で不惑、五十歳で天命を知り、六十歳で耳順う、「七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず」と、年齢別生活目標を掲げます。

人は年を取ると、体力、記憶力は衰えますが、分からなかったことが見えてくることも確かです。その一つがほとけのはからいです。生涯各時期は意味があるのです。

法然上人鑽仰会の

本

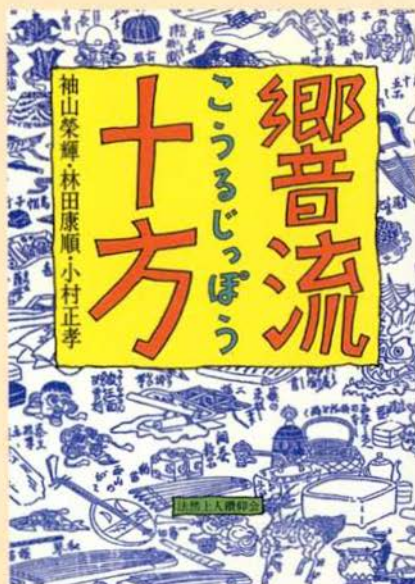
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

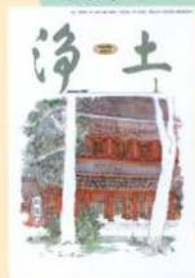


響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

「差出人は法然さん」
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



「念佛讀本」完全復刻版
1,600円



※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より